

新刊紹介

◆『矢野龍溪』

野田秋生著

(編集・大分県立先哲史料館)

発行・大分県教育委員会

平成十一年三月三十一日刊 B6判 三五二頁

本書は

『矢野龍溪

資料集』全

八巻を踏ま

えて、野田

秋生氏(元・

高校教諭)が

執筆した矢

野龍溪の評

伝である。

本書の構成を示すと、次のとおりである。

序章 豊後国佐伯

第一章 三田系知識人としての出発



第二章 『郵便報知新聞』記者の時代

第三章 法制官僚の時代

第四章 立憲改進黨幹部の時代

第五章 小説家龍溪の誕生

第六章 外遊二年

第七章 帰国後の龍溪の活動

第八章 国会開設前夜

第九章 宮内省出仕時代

第一〇章 駐清特命全權公使の時代

第十一章 「社会主義」者時代

第十二章 明治末年の龍溪

第十三章 大阪毎日新聞役員の時代

監修者の松尾尊允氏(京都橘女子大教授)は、「野田氏の資料収集はすこぶる行届いたもので、大分県内・親族関係はもとより、国会図書館・外交史料館・早慶両大学・毎日新聞社等々に度々足を運んだ。龍溪の京都における定宿可楼の所在地まで確認につとめるといふ念の入れようであった。圧巻は、龍溪が青壮年時代もつとも力を注いだ郵便報知新聞の無署名社説の中から、彼自身の執筆にかかわるものを大量に選り出したことである」と

語っている。

また、野田氏によって、「新聞・政治・外交・文学など各方面にわたる龍溪の足跡が、ここにはじめて明かにされ、龍溪研究のための確乎たる基礎が築かれたといつてよい」と、高く評価している。本書を読むことで、龍溪の全体像がほぼつかめるのではないかと思う。佐伯史談会や佐伯市民の方々に是非一読を奨めたい。

本書は本文の伝記のほかに、巻末につけられた註・龍溪矢野文雄年譜と索引は本の作成に手間をかけられたものであり、今後の研究者に大いに役立つものである。序文は田中恒治県教育委員長・題字揮毫は県知事平松守彦・カバー画は石垣原養護教諭右田恒夫による。(矢野)

◆「鶴見町の自然」

鶴見町産業振興課

平成十二年十二月二十日刊 A5版 二二二頁

本書の内容は、書名が示すように鶴見町の自然を紹介したものである。その構成をみると、四部に分かれており、環境・植物・動物・資料の各編からなっている。その構成・目次及び執筆者をあげて紹介したい。



環境編

気象・地質

井原 伸芳

植物編

グラビヤ

真柴 茂彦

鶴見町の代表的な植物

荒金 正憲

海辺から森までの植物

真柴 茂彦

南からきた植物

鶴見町を代表するウバメガシの林

今井 勉

シダ植物

辻 寛文

海藻

神田 正人

動物編

哺乳類

志水 輝昭

資料編

植生調査記録・フロラ

鶴見町の鳥類
竹中 正直
武石 宣彰
森や水辺の小動物
藤澤 信一
サツマゴキブリがすむ島
藤澤 信一
鶴見町の陸産貝類
神田 正人
海辺の小動物
真柴 茂彦
モミジガイから採集された微小貝
濱田 保

植物目録

種子植物

荒金 正憲
真柴 茂彦
今井 勉
荒金 正憲

シダ類

辻 寛文

海藻

神田 正人

動物目録

鳥類

武石 宣彰

昆虫

三宅 武

陸産貝類

佐々木茂美

魚類・海産動物

神田 正人
真柴 茂彦

ついで次のように述べている。

(前略)町では平成九年度より平成十四年までの五ヵ年計画で「ふるさと市町村圏基金の運用にかかわる補助事業」の一端として、町おこしのための、事業計画をいたしました。

これを機に平成九年八月より平成十一年三月まで「鶴見町動・植物調査」等計画し、基礎的な資料を得ることになりました。

町内では、豊後水道域の調査として、自然、動・植物の調査は一部分ありますが、これまでの総合的な自然調査は行われていませんでした。

短期間ではあったが、この研究が、県下の研究者のご協力を得て行われ、予想どおりすばらしい自然が残っていること、多くの亜熱帯系の動・植物の確認など、多くの成果を挙げることができました。

このたび、すでに提出されている資料を、より分かりやすく町民へ紹介したいとの調査研究者の希望により小冊子が完成いたしました。

この冊子は町民のふるさとの理解に、観光振興計画への基礎資料、あるいは子どもたちの教育等大いに役

発刊にあたって、佐野町長は本書刊行の意義、経過に

立つものと考えております(以下略)。

本書についての問い合わせは真柴茂彦氏(0972・22・1736)へ。(矢野)

◆『古市の生活史』

古市歴史研究会

平成五年三月刊 A5版 二四八頁

古市地区

が老人会

の「心身すこ

やか運動」

の記念事業

として発刊

したもので

ある。この

冊子は四編

からなっているが、古市地区の人々の生活記録・体験記が中心となっており、地区の人々の生きざまが、飾らない言葉で、平易に記述されて、親しみのある、肩のこらない「読みもの」になっている。貴重な歴史書である。



いま、本書の概要、各編の特色を述べ紹介したい。第一編は梅牟礼と古市について編さんし、梅牟礼城の規模と構造について城郭研究者と知られる小野英治氏が特別寄稿している。また、香嶋銀一氏が「古市愛宕神社」、江藤操氏がお塔さん(十三重の塔)について調査結果を報告している。

さらに、第一編では、古市地区の中世・近世を学習するうえで役立つ「参考資料」を、大神姓佐伯氏・梅牟礼発掘調査概報・十三重の塔発掘資料・古市周辺にのこる昔話など十二項目の多岐にわたる紹介をしている。

第二編は、番匠川と古市について、地区の人々と番匠川のかかわりについて各自の体験記が語られて興味深いものがある。特に、昭和十八年の大水害の記録は貴重な歴史資料である。

第三編では、「戦時下の古市」について、江藤操氏が自己の体験をもとに、出征兵士のこと、戦時中の衣類や食糧、太平洋戦争中の佐伯市と古市のことなど記述。すぐれた記憶力と見事な表現力で、思わずひきこまれ、一気に最後まで読ませる。体験記のおわりに、「あの当時から四十七年、なつかしい思い出を綴る時、純情で精

いっばい生きた青春でした。楽しいこともいっばいありました。つくづく思う事は「あんなひどい事が二度とあつてはならない」と述べている。

第四編では、「古市のくらし」について地区の人々の体験記を中心に、三十三項目の多岐にわたり、多くの資料や写真・地図を入れてまとめている。

この小冊子は、失われ、忘れられていく郷土の生活史を掘り起こしまとめたもので、次代に生きる人々の心の故郷ふるさとになるにちがいない。ずっしりと重みのある古市地区のすばらしい庶民史である。一般の人々の一読をお勧めしたい。

題字、口絵は江藤磯吉。刊行のことば木許讓(古市老人クラブ会長)、発刊に寄せては香嶋銀一(古市区長)、監修は矢野彌生、あとがきは前区長の藤田喜代一。

(矢野)

◆『駆け抜ける茂吉』

—「先覚記者」藤田鳴鶴評伝—

野田秋生著

(発行・沖積舎)

平成十二年四月二十日刊 B6判 三〇八頁

本書の著

者は、元県

立高等学校

教諭(昭和三十

一年東京

教育大文学

部卒で、日

本史専攻)

で、大分県

地方史研究会参与、著書は『矢野龍溪資料集』全八卷

(大分県先哲叢書刊行会)、『大分県政党史の研究』(京都

山口書店)、『評伝・矢野龍溪』(大分県先哲叢書刊行

会)、その他に『大分県労評三十年史』、『大分県史』近

代篇一〜四卷、『豊後高田市史』、『臼杵市史』、『庄内町

史』などの共著多数。

著者は大分県の近・現代史ですぐれた実績をもつ郷土

史家である。本書の冒頭は、「鳴鶴藤田茂吉は、もと豊

後国佐伯藩の水主かこ平四郎(明治二年から林姓を称す)・シ

ンの三男として嘉永五(一八五二)年、佐伯鶴屋城下の船



頭町(現大分県佐伯市向島)に生まれた。二人の兄のほか姉一人があつた」にはじまるこの評伝を読むと、今まで詳しく知られなかつた藤田茂吉の生涯、彼の実像がよくわかり興味深い。

著者は藤田茂吉について端的に次のように評している。

(前略)調べ始めて見ると、鳴鶴藤田茂吉は筆者に、きわめて魅力的な人物であることが見えて来た。魅力は例えば、矢野が百科全書の教養人・余裕派・上流趣味人なのに対して、ほぼ一貫して新聞人だつた藤田鳴鶴は、時事批評家・行動派・平民的感性の人として鮮やかな対照を示している点にある。また、それは、酒を愛し、旅を愛し、詩を愛し、芝居を愛し、しかし裸体画には憤慨するような人となりの中にある。そして、彼の「多年の志業」は最後までそういう個性に貫かれていたのである。

しかし、それだけではない。藤田は自由民権論の初期に、もと政府系だつた『郵便報知新聞』を代表的な民権派大新聞に育てあげたことが、民権運動の潮流を確かなものにする上に果たした役割や、筆力

を謳われたその論説の目配りの利いた問題把握や、特に対朝鮮・支那(中国)論におけるユニークな発言(中には国境無き医師団派遣の提唱などもある)は確かに見直されて然るべきものを持つていたのである。

その後も彼は政党人として、東京府会議員として、衆議員として、政治の現場での活動を続けて、それぞれの局面で常にキイパーソンであつた(以下略)。

著者はこの評伝について「伝記として均衡を失しない範囲で歴史的背景・文脈を示すように心掛けた結果、伝記としては堅苦しくなりすぎたかもしれない」と述べている。

確かにそのとおりであると思う。伝記としてよりも、むしろ藤田茂吉を中心にした史書として読めば大いに参考になるのではと考えるのである(独断だが)。

また、この評伝は、他の伝記にはないような、厳密な考証をえて記述しており、一つ一つ、引用資料の出版(ページ数までも記入)を明らかにしており、安心して読める歴史書である。さらに、この評伝により、佐伯の近

代史の新しい側面も見えてくるのでは。

最後に、本書の構成をあげると、次のとおりである。

第一章 世に出るまで

一 豊後国佐伯

二 慶応義塾での青春

第二章 操觚界への登場

一 『郵便報知新聞』入り

二 『郵便報知』編集者の時代

三 西南戦争前後

第三章 都市民権派論客の時代

一 江木学校と詩友たち

二 「国会論」と『郵便報知』の論調

第四章 明治十四年の茂吉

一 私考憲法草案

二 明治十四年政変前後

第五章 立憲改進黨幹部の時代

一 立憲改進黨の結成

二 民権運動分裂記の茂吉

三 『文明東漸史』

第六章 東京府会議員としての活動

一 府会での論戦

二 市区改正論

第七章 雌伏三年

第八章 茂吉の文芸

一 院本戯曲とシェイクスピアの紹介

二 『済民偉業録』と孟子的民権論

三 茂吉の「詩と真実」

第九章 外遊と『観風叢話』

第十章 衆議院進出 そして早すぎた死

【註】

□絵は四頁(ロンドンにての茂吉の写真(明治二十二年)、鈴子夫人、慶応義塾時代の茂吉、茂吉宅に寄食当時の犬養毅、栗本鋤雲、親友朝吹英二、報知社入り当時の矢野龍溪、明治二十二年第一次外遊時代の尾崎行雄の各写真)。佐伯の郷土史に関心をお持ちの方には是非一読をすすめたい藤田茂吉の評伝である。(矢野)

◆「大分県のシシ垣」

— 民俗文化財 シシ垣調査報告書 —

(発行・大分県教育委員会)

平成十三年三月三十一日刊 A4判 七三頁

本書は大

分県教育委

員会が平成

十一年

度の三か年

国庫補助事

業を受けて

実施した

「民俗文化

財シシ垣調事業」の報告書である。調査の事業主体は大

分教育委員会であり、文化庁文化財部伝統文化課の指

導・助言を受けて実施したものである。

最初に本書の構成を示すと、次のとおりである。

第1章 はじめに

1 調査の目的

2 調査体制

3 調査の経過

第2章 民俗文化財「シシ垣」の概要及び分布

1 「シシ垣」研究史について

2 「シシ垣」の構造について

3 「シシ垣」の分布状況

1 西日本地区を中心に

2 大分県

第3章 大分県内の「シシ垣」について

第1節 県北地域の「シシ垣」

1 立地と環境

1 歴史的背景

2 自然的背景

2 「シシ垣」の分布

1 国見町の「シシ垣」

2 その他の地域の「シシ垣」

第2節 県南地域の「シシ垣」

1 立地と環境

1 歴史的背景

2 自然的背景

2 「シシ垣」の分布

1 鶴見町の「シシ垣」

2 蒲江町の「シシ垣」

3 米水津村の「シシ垣」

4 その他の地域の「シシ垣」

第4章 総括

1 民俗学的アプローチ

2 大垣と高山の「シシ垣」について

3 文化財としての「シシ垣」の将来展望について

本書の冒頭に「県内各地に、畑地等を猪や鹿の被害から守るために、土塁や石垣による「シシ垣」が作られ、現在も南海部郡や国東半島を中心に残存している。これらの「シシ垣」は、江戸時代から明治・大正・昭和を通して、地域の人々の手によって築かれたもので、当時の人々の生活、生業を示す貴重な民俗文化財といえる。

しかし、昨今の社会・経済構造等の変化により、「シシ垣」はその役目を終えるところに、崩壊・荒廃の危機に瀕している。このため「シシ垣」の現状を把握するとともに、特に顕著に残存している箇所については詳細な調査を行い、保存・活用を図るための基礎資料を作成す

ることを目的とする。」と、調査の目的や意義について述べている。

本書を読んで感ずることは、全国的な視野に立って、大分県の「シシ垣」の状況を紹介し、調査を専門家の実地測量、多くの実測図や写真、シシ垣模式図などを転載し、読みやすく、「シシ垣」について誰でも判りやすく、興味深く、平易にまとめていることではあるまいか。

本書の紹介の中で、驚き、興味をそそるのは、全国的な「シシ垣」の分布の中では、日本一の規模ともいえるべき、香川県小豆島の「シシ垣」、寛政二年（一七九〇）に長さ三十里（二二〇¹）に及ぶシシ垣が完成していることや、長崎県西彼杵半島に残るシシ垣の記録は、江戸時代から見られるため、研究史の中では重要であるという点である。

本書によれば、西彼杵半島一帯は、江戸時代には大村藩に属する地域であり、シシ垣は藩の記録に残っているものである。すなわち、「外海山近年猪鹿繁殖し田畠作毛荒せしゆえ村中の者共申談、享保七年壬寅六月より猪留石垣を造築す、右普請成就の上は荒野にて田畠余程出来可申筈にて当村より相始し処追々大田和七ツ釜多以良

瀬戸も同様に造築す、其高サ五尺或は六尺にして仰見の高嶺に跨り無底の深谷を越して山野の境界を限り猪鹿の蹄跡を防ぎ留む、然るに今は百三十余年の星霜を歴て所々破損したる処多し」(『大村郷村記』へ中浦村)とあり、有力な文書記録の一つであり、「享保七年壬寅六月より猪留石垣を造築す」とは、現在残っている長崎県指定有形民俗文化財の猪垣基点の碑文を裏付けるものである。

この記録により、「猪留石垣」なるものが西彼杵半島の大和田から七ツ釜、あるいは多以良、瀬戸へと造られたことが分かる(以下略)。

現在、判明しているものだけでも、全国分布をみると、北は岩手県から南は沖縄県までの広範囲で「シシ垣」があり、一府一九県に及んでいる。

次に、同書によって大分県内の「シシ垣」の分布とその特徴について概要を紹介しよう。

大分県のシシ垣は海岸部に集中し、県北の国見町・安岐町、県南の弥生町・佐伯市・鶴見町・米水津村・蒲江町で確認されているが、今のところ山間部や平野部では確認されていない。

県北を代表するシシ垣として国見町榑木のシシ垣がある。現在のシシ垣は、海岸部を起点として榑木浦を囲うように東を岐部、西を伊美と境をなす丘陵の尾根上を走り、総延長約十二時にわたって存在する。

この国見町のシシ垣の特徴は、シシ垣の築造と村の神社の背景に動物愛護(自然保護)というか、自然との共生の思想があることである。

本書ではその関係を次のように説明している。興味深いものがたりである。すなわち、「このシシ垣については、鹿の被害が大きく村民が困惑していたことを憂えたこの地区の庄屋の小串要助が、村境にシシ垣を築くことを計画し、村民の協力を得ながら寛政十年(一七九八)着工し五年の歳月をかけて享和二年(一八〇二)に完成したといわれている。

ところで、この榑木地区にはケベス祭り(国選択無形民俗文化財)で有名な岩食神社(榑木社)があり、古来より榑木地区の大半が氏子となっている。ところで、この岩倉神社の言い伝えに「鹿の肉と知って食べれば即死、知らずして食すれば百日の患い」というものがあり、鹿を食べることも殺すことも禁じられている。この禁忌は

現在も残っており、この地区に住む人々は決して鹿肉は食べないそうである。

シシ垣築造の工事では、山奥から進め、海岸部に鹿の逃げ道を作っておき、最後に村民で鹿を追い出した後に逃げ道をふさいで工事が完了した。」という。

県北地域では国見町以外では、現在のところシシ垣が確認されている地域は安岐町である。平成十年度の悉皆調査で報告されたのは朝来地区二カ所と山浦地区の一カ所である。但し、現地調査を行っていないため、その規模・構造については不明という。

最後に県南地区について、その概要を本書を引用しながら紹介したい。県南地区でシシ垣が確認されているのは鶴見町をはじめ、蒲江町・米水津村・佐伯市・弥生町である。

鶴見町のシシ垣は十数段に及び、特に規模が大きく、古くから知られ、一部は観光用に整備されて、見学した人も多し。シシ垣の特徴は鶴見半島の稜線に沿って各地区を囲むように築かれていることであり、その両端は下つて谷につながっているものが多いことである。多くは二メートル程であるが、所によっては二メートルを超える高さまで

石垣を築いているものもある。

このことにより、イノシシだけでなく、鹿も対象に築かれたと考えられる。

また、築造年月は不詳であるが、江戸時代中期までの文献に築造に関する内容が出て来ないことから、江戸

時代末期以降と考えられる。さらに、『鶴見村誌』（昭和三十年八月発行）によると、「此の猪垣について佐藤鶴谷によると明治四十五年左右、時の郡長齋藤利明猪害を防がんがため地方民を懲（しん）辱（じやく）して築かしたもので、以来多数による猪の暴力も減少し、完全とはいかぬが、甘藷も相当とれるようになり、村の人たちは齋藤郡長の



鶴見町中越地区のシシ垣
（『大分県のシシ垣』による）

遺恵を喜んでゐるとの事であるが、一書によると此の猪垣は安政二年に築造とある」と書かれている。

また、国木田独歩は、作品「鹿狩り」の中で鶴見町の猿戸に鹿狩にきて、シシ垣に接し次のように書いてゐる。「大里の方へはすっかり高い壁が石で築いてあつて畑を荒らされないようにしてある故(中略)其方に逃げる事ができない」。日記によれば、独歩の猿戸訪問は明治二十六年十二月三日で、すでにシシ垣が存在したことは明らか。

なぜ、シシ垣をつくるようになったかという、『梶寄郷土史』(黒木今雄著)には、「江戸時代佐伯の藩主毛利公は禄高二万石の殿様であつたが、藩の財政は豊かであつたと言われる(中略)なぜなら、此の海岸地域の漁獲に対する賦課金、つまり手数料の金が膨大であつた(中略)高泰公は、農地の開墾をすすめた。それまでの農地は殆ど焼畑農業だったが、此の度の開墾で段々畑に切り換え、一気に三十六町歩を開墾し、人口に対する自給自足の農地を確保した事になつた。」と、書かれている。確かに鶴見町には米を作るうにも田園になるような広い土地が少なかつた。このため、狭い土地を活用するた

め、山頂まで段々畑を築き、サツマイモを植えたと思われる。こうして造られた畑をイノシシ等から守るために築造されたものといわれている。この築造に關しては地域の人たちが自分たちの自衛のために自分たちが行なつたのか、藩が奨励して行なつたのかは明らかでないと思書はいう。

鶴見町のシシ垣の構造は各地区で異なるが、有明浦から下梶寄地区までは石を積み上げて造られている。使われた石はその付近にある石を使っているが、その加工技術は優れたものがある。吹浦においては、堀の形である。次にシシ垣の維持補修は、明治―大正―昭和十年代までは、必ず年二回、村総出で草刈りや破損箇所を補修をしていた。しかし、吹浦は他の地区とは違い個人的に管理していた。しかし、昭和三十年頃から日本の経済が成長期に入り、若者たちが出稼ぎで次々に都市へ出て行き、労働力不足になる。苦勞して山の頂上まで畑を耕作するより、工場で稼いだ方が楽な時代になっていき、さらに流通事情が改善され、食糧を自由に手に入れることができるようになると、サツマイモの耕作は減少していった。

このため、山頂まであった段々畑は放任され、シシ垣の価値も失われていった。そして建設当時あたかも「万里の長城」を思わせたシシ垣は、今のように雑木に覆われ、集落から望むことはできなくなった。吹浦においては、昭和四十五年頃にイモ畑をミカン畑に転換したときに、堀を埋めてしまった。石は段々畑の石垣に使われた。

鶴見町では鶴見町文化財調査委員会を中心に、このシシ垣の保存に力を入れており、平成二年度にふるさと創生事業により、中越浦の山頂にあるシシ垣の一部を修復するとともに遊歩道を整備した。さらに平成三年十一月十五日につるみ町民センターにおいて「シシ垣シンポジウム」を開催し、シシ垣の民俗文化財としての価値を広く発信している。

鶴見町に続いて、蒲江町も典型的なリアス式海岸で平地に恵まれない自然環境で、段々畑が多い。したがって町内各地にシシ垣が散見される。本書では、①旧上入津村、②旧下入津村、③旧蒲江町、④旧名護屋村に分けて調査結果をまとめている。

先ず、旧上入津村であるが、畑野浦の集落の背後にシシ垣が存在しているが、対岸の西野浦や竹野浦河内など

他の入津湾に面した入江に比べ、稲作ができるだけの土地と豊富な水量を持つていたため、個別にはあまり形成されていないようである。

旧下入津村では、竹野浦河内地区が地下と呼ばれる河内湾に

面した入江と山を越した南側の元猿湾に面した元猿・高山地区両方でシシ垣の存在が確認されたという。山が北面に面した河内湾側では、集落の背後にある東側の畑からほぼ切れることなく集落をとり囲むようにシシ垣が形成されている。さらに隣接する高山地区では集落の背後に土地がないため、山の中腹の平坦地を開墾しこれを囲むようにシシ垣が形成されている。この地区の聞き取り



蒲江町高山地区のシシ垣
（『大分県のシシ垣』による）

調査によると、専業の職人ではないが「エバ」と呼ばれる技術者がその構築に携わったという。この地区ではシシ垣は「ドイ」と呼ばれる。

旧蒲江町の蒲江浦の耕作地は集落の背後を取り巻く八十坪程の山の段々畑と通称「高山」といわれる集落から一つの峠を越えた地区と蒲江湾の入江の奥の「河内」である。この段々畑と高山をイノシシの害から守るために山の中腹を带状に「大垣」と呼ばれるシシ垣が構築されており、総延長は数キロに及ぶ。このシシ垣は、そのほとんどが高山海岸の浜石を使って作られている。

その他、小向地区・河内地区・猪串浦にもシシ垣があるという。

最後に、旧名護屋村では、野々河内・森崎浦・丸市尾浦にはシシ垣があるという。しかし、葛原浦・波当津浦の二浦ではシシ垣は構築されていないことである。

蒲江町のシシ垣は大きく三種類に分類できるといふ。すなわち、第一は集落の共同作業で構築された大規模な蒲江浦の大垣に代表される。第二は耕地の極端に少ない西野浦の山の中腹よりずっと上にある鱗状に形成されたシシ垣。そして第三は、適当な耕作地に恵まれた地区の

自分の所有地を取り巻くように構築されたシシ垣である。製作の時期は、ハッキリとした古文書等は残されていないが、おそらく江戸中期から末期に構築が始められ、昭和三十年代まで続いたものと思われる。

次に、米水津村のシシ垣について本書によって紹介したい。同村のシシ垣は構築時期については不明。シシ垣の分布は竹野浦・小浦・浦代・色利浦・宮野浦・間越はざととほぼ全域にわたっている。大部分のシシ垣は入り江に形成された小さな平野部分の後背部に作られた畑を囲むように展開している。その点では、鶴見町のシシ垣のあり方より蒲江町のそれに類似している。

その他にシシ垣が県南で確認



米水津村小浦地区の山腹のシシ垣
（『米水津村誌』による）

されたのは、佐伯市・弥生町である。いずれのシシ垣も、比較的小規模なものが多く、基本的には畑を囲むタイプのもので、蒲江町や米水津村で多くみられるものに類似する。

佐伯市では、市の南西部大字青山において七カ所確認された。この分布状況については、佐伯史談会員・弥生町文化財調査委員で、郷土の民俗研究者である五十川千代見氏の見氏の助言・教示によるものである。五十川千代見氏は県の調査員、佐伯市教委の文化係・文化財調査委員を現地に案内し、助言された。

青山地区の七カ所のシシ垣は、いずれも堅田川の支流の黒沢川の流域沿いにあり、比較的民地に近い斜面に展開する畑を囲むように築かれている。林道で壊されている部分も見受けられるが、その全体像の復元は可能である。いずれのシシ垣も、山石を積み上げたもので土壁は用いていないが、自然地形を巧みに利用している。

各シシ垣について紹介すると、岡の谷地区では全周約二〇〇メートルに及ぶ。石垣も比較的残りがよく、最大で高さ二・五メートル。また、もう一カ所のシシ垣は林道工事等で破壊が進み、ほとんどその姿をとどめていないが、部分的

に石垣が残り、堀も一部確認できる。

黒沢において確認されたシシ垣は、一カ所は石垣は全周せず、北側は川と浅い谷に接する。もう一カ所のものは、黒沢川の支流、坂本川に形成されている坂本谷で確認されたもので南北方向に二条のシシ垣を築いている。また、北側のシシ垣に囲まれた部分に『水神社』の祠があり、「嘉永七年寅九月吉日」との銘がある。

川井にあるシシ垣は、堅田川と黒沢川が合流する部分に張り出す尾根の先端にあり、東西六〇メートル、南北四〇メートルの規模のもの。

棚野のシシ垣は現在確認されている佐伯市のシシ垣の中で最も高所（標高二五〇メートル付近）にある（ここ以外のは標高五〇〜八〇メートルにある）。二基のほぼ円形なシシ垣が南北に隣接している。いずれのシシ垣も一部林道に寸断されているが、ほぼ原形を留めている。南側のシシ垣は東西五〇メートル、南北四〇メートルで高さ一・二〜一・五メートルの石垣が巡る。以上は同書により佐伯市のシシ垣を概説した。

最後に弥生町のシシ垣について紹介したい。弥生町のシシ垣は七カ所で確認されており、すべて大字尺間に含

新刊予告

まれる地域にある。そのうち、六基は畑を囲むタイプ、一基は蒲江町の大垣のように長くのびるタイプになるものと思われる。七カ所の所在地であるが、宇藤木(二カ所)・提内(一カ所)・年の上(一カ所)・田ノ平(三カ所)に分布が確認された(ここのシシ垣については弥生町の文化財調査委員・佐伯史談会員の五十川千代見・同小野英治の両氏の助言と教示によるものである)。

本書は巻末に次のように指摘して結びとしている。「鶴見町ではその一部が歴史的遺産として整備されているが、シシ垣は民俗文化財としてだけでなく、斎藤忠氏が早くから指摘したように歴史考古学上の取り扱うべきものであり、当時の人々の生活を明らかにしてくれる記念物でもある。」と。

本書は民俗だけでなく、郷土史や考古学に関心のある方は是非一読をおすすめしたい。序文は田中恒治(県教育委員会教育長)、執筆者は立平進・荒金正憲・生野喜和人・小泊立矢・菅野剛宏・清家隆仁・渡辺周三・渋谷忠章・吉永浩二・江田豊の各氏が担当している。編集は県文化課。さらに、豊富な写真と図版で解説を試みてい

る。(矢野)

『色利浦御手洗大庄屋文書』第一巻

米水津村には、色利浦御手洗大庄屋文書、竹野浦御手洗文書、浦代成松庄屋文書、宮野浦小畑文書など貴重な地方文書が多数残されているが、米水津村古文書研究会では、それらの文書の解説を進め、逐次本としてまとめて行く方針で、近く予想される市町村合併までには、すべてを終了したいとしている。

このうち第一巻「色利浦御手洗大庄屋文書」は解説、編集を既に終わり、教育委員会の助成により新年度初頭発行されることになっている。

内容は原本の写しと、その下段に解説文、字句説明などを付し、B5のプリント判、約240ページを予定。

『因尾村大庄屋文書』(御郡廻りの部)

本匠村の近世文書研究会では、会員七名で解説した因尾村大庄屋文書のうち、天保十年の御郡廻り(藩主の領内巡視)に関する「御廻状写」「申付方万控」「諸事心得」を、近くプリントして発行する。

内容は原文の写しと、其の「書き下し文」及び簡単な解説と字句説明を付したものを、本匠村の一般の人に読んでもらえることを目標としている。B5のプリント約220ページを予定。

(矢野徳彌)